

# ライトノベルにおける男性主要登場人物と女性主要登場人物のパーソナリティの組み合わせの検討

高坂康雅 *KOSAKA Yasumasa*

- 1 — 問題と目的
- 2 — 方法
- 3 — 結果
- 4 — 考察

【要旨】本研究の目的は、ライトノベルの男性登場人物のパーソナリティと女性登場人物のパーソナリティとの組み合わせを検討することであった。大学生 59 名に対して、ライトノベル 10 作品から男性登場人物・女性登場人物各 1 名を選び作成した人物紹介文を提示し、TIPI-J を用いて、パーソナリティ評定を求めた。相関分析の結果、ほとんどの作品において、男性登場人物のパーソナリティと女性登場人物のパーソナリティの間にはあまり関連がみられなかった。また、クラスター分析によって登場人物を 4 つのタイプに分け、作品ごとにクラスターの組み合わせを検討したところ、男女が同じクラスターである組み合わせは少なく、一方が「安定適応型」である組み合わせがほとんどであった。この結果は、久米 (2009) の指摘とも合致していると考えられた。

## 1 — 問題と目的

近年、小・中学生の読書冊数が増加傾向にあり、2016 年 5 月における平均読書冊数は、小学生で 11.4 冊、中学生で 4.2 冊となっている (全国学校図書館協議会, 2016)。これらの冊数のなかには、一般的な小説や図鑑なども含まれている一方、ライトノベルと呼ばれる種類の本も含まれている。ライトノベルの定義は明確にはなされていないが、日経キャラクターズ (2004) では、ライトノベルを「表紙や挿絵にアニメ調のイラストを多用している若年層向けの小説」としている。全国学校図書館協議会 (2016) の第 62 回学校読書調査によると、ライトノベルを「読む」(「よく読む」+「たまた読む」) と回答した割合は、小学生で 50%、中学生で 44%、高校生で 30%となっており、年齢が上がるにつれて読まなくなる傾向にあるものの、ライトノベルは小学生から高校生にかけて広く読まれていることが推測され、「児童・生徒の読書の入り口になっている」(全国学校図書館協議会, 2016) と指摘されている。

全国学校図書館協議会 (2016) はライトノベルを読む理由についても調査している。そ

の結果、「ストーリーがおもしろいから」が小学生（76%）・中学生（78%）・高校生（78%）のいずれにおいても、ライトノベルを読む理由として、最も多く選ばれていることが明らかにされている。このストーリーについて、久米（2009）は、「(ライトノベルの) 人気作の多くがSFや伝奇や冒険小説の体裁を取ったボーイ・ミーツ・ガール物語であり、少年の側の視点で語られる」恋愛物語であると述べている。このようなストーリーに加え、「カバーや口絵の少女イラストはいわばグラビアアイドルの写真に相当し、少年のまなざしを惹きつけるための工夫が凝らされている」とも指摘している（久米, 2009）。この指摘を支持するように、全国学校図書館協議会（2016）によるライトノベルを読む理由に関する調査では、「ストーリーがおもしろいから」に次いで「絵が好きだから」（小学生 39%、中学生 49%、高校生 44%）、「登場人物が好きだから」（小学生 29%、中学生 41%、高校生 34%）が続いている。

これらの結果から、ライトノベルにおいては、ストーリーが重要であるとともに、絵・イラストを含めた登場人物が魅力的であることが求められると考えられる。榎本（2008）がライトノベルについて「青年期の読者を対象とし、作中人物を漫画やアニメーションを想起させる『キャラクター』として構築したうえで、それに合わせたイラストを添えて刊行される小説群」と定義しているように、登場人物の“キャラクター”が読者にとっても作者にとっても、重要視されていると考えられる。しかも、ボーイ・ミーツ・ガール物語であることから、男性主要登場人物（以下、登場人物）と女性登場人物が登場し、両者が徐々に親密になっていく過程（ストーリー）が、小学生から高校生を（あるいはそれ以上の者も）惹きつけていると考えられる。

このような男性登場人物と女性登場人物のパーソナリティについて、久米（2009）は「地味で内向的な少年と元気活発で戦闘も辞さない少女という、むしろ伝統像とは対照的な組み合わせが増えている」と指摘している。しかも、そのような組み合わせが新しいジェンダー関係の構築を意味しているのではなく、「実は少年は少女より判断力があり、結果的に少女をリードする立場となっている」、「一見すると主人公の少年がひ弱で、強い少女に圧倒されるようにみえても、結局は従来通り少年の活躍で決着する少年小説」であり、「ライトノベルの少女が必ず優れた容姿を持ち、少年のために活動しつつも、ここぞという危機には必ず少年に助けられる—結局は少年のアイデンティティを支える存在である」とも指摘されている（久米, 2009）。

このように考察されるライトノベルの男性登場人物と女性登場人物のパーソナリティについて読者はどのように評価し、その評価が、久米（2009）が指摘するような構造となっているのであろうか。本研究では、ライトノベルの男性登場人物と女性登場人物のパーソナリティの組み合わせについて明らかにし、そこに描かれているジェンダー観を探索することを目的とする。

## 2 — 方法

### 調査対象者

東京都内の大学生 59 名 (男子 24 名、女子 34 名、不明 1 名；平均年齢 20.0 歳、標準偏差 1.0 歳) を調査対象者とした。

### 調査内容・手続き

雑誌『ダ・ヴィンチ』が行った「電子書籍アワード 2014 ライトノベルランキング」において、1 位から 10 位になったライトノベル作品 (1 位の作品を“作品 1”と呼び、以下同様) を分析対象とした。調査協力者が各ライトノベルの第 1 巻を読み、男性と女性の登場人物を各 1 名選定した。次に選定した登場人物の特徴を、ライトノベル内の記述をもとに抽出し、5 行程度の人物紹介文を作成した (Appendix 参照)。この際、選定した人物が必ずしも「人」であるとは限らず、また一般的な「人」では行うことができない行動をしたり、いわゆる「超能力」などを有していたりするなど、多様な設定がされている場合があったが、本研究においては、これらの設定を示さなかったり、一般的な「人」がとれる行動・能力に言い換えるなどの変更を行い、一般的な「人」を紹介する文章として作成した。作成された文章は調査協力者などが、ライトノベルでの記述と照らし合わせて確認し、適宜修正を行った。

作成された人物紹介文について、調査対象者にパーソナリティ評定を求めた。パーソナリティ評定には、日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J; 小塩・阿部・ピノ, 2012) を用い、各項目の文末には、「…と思う」をつけた。それぞれの人物紹介文について、「この人物は、どのような性格の人だと思いますか」という教示のもと、1. 「全くあてはまらない」、2. 「あてはまらない」、3. 「あまりあてはまらない」、4. 「ややあてはまる」、5. 「あてはまる」、6. 「とてもあてはまる」の 6 件法で回答を求めた。

調査は 2 回に分けて行った。まず、男性の登場人物 10 名の人物紹介文とそのパーソナリティ評定を行う男性版質問紙と、女性の登場人物 10 名の人物紹介文とそのパーソナリティ評定を行う女性版質問紙を作成した。2016 年 6 月中に、講義時間の一部を用いて、男性版質問紙を行った。男性版質問紙を行った同一講義において、翌週、女性版質問紙を実施した。男性版質問紙と女性版質問紙の両方に回答した調査対象者のデータのみを使用した。なお、対象者の照合は、表紙に付箋を貼り、そこに学籍番号を記入してもらうことで確認した。同一対象者であることが確認できた時点で付箋をはがした。

調査の実施に際し、調査への協力は任意であること、学籍番号の記入は対象者の照合のために求めるものであり、誰がどのように回答したかを把握するためのものではないこと、付箋に記入する学籍番号以外、個人を特定する情報の記入は求めていないこと、回答を拒否しても不利益は生じないことなどについて、表紙に明記するとともに、口頭でも伝えた。

### 3 — 結果

#### 各ライトノベルにおける男女登場人物のパーソナリティの関連

まず、各登場人物に対するパーソナリティ評定について、各下位尺度2項目の平均を算出し、それぞれ「外向性」得点、「協調性」得点、「勤勉性」得点、「情緒不安定性」得点、「開放性」得点を算出した。

次に、各作品における男性登場人物のパーソナリティ評定と女性登場人物のパーソナリティ評定の相関を算出した (Table 1~10)。

その結果、作品1では、男性登場人物の「外向性」得点と女性登場人物の「開放性」得点が有意な負の相関を示し ( $r=-.27, p<.05$ )、男性登場人物の「協調性」得点と女性登場人物の「勤勉性」得点が正の相関 ( $r=.28, p<.05$ )、「情緒不安定性」得点が負の相関 ( $r=-.27, p<.05$ )を示した。また、男性登場人物の「情緒不安定性」得点と女性登場人物の「情緒不安定性」得点が正の相関 ( $r=.30, p<.05$ )を示した。

作品2では、男性登場人物の「勤勉性」得点と女性登場人物の「情緒不安定性」得点が負の相関 ( $r=-.30, p<.05$ )を示した。

Table1 作品1における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

				女性		
		外向性	協調性	勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	.21	.05	.13	-.23 †	-.27*
	協調性	.07	.17	.28*	-.27*	.06
	勤勉性	.12	.06	.08	-.03	-.01
	情緒不安定性	-.26 †	-.05	.02	.31*	.18
	開放性	.16	.05	.19	-.23 †	-.21

\*  $p<.05$ , †  $p<.10$

Table2 作品2における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

				女性		
		外向性	協調性	勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	.07	-.07	-.11	.02	.11
	協調性	-.19	-.06	.23 †	.04	.10
	勤勉性	-.20	-.02	.02	-.30*	.10
	情緒不安定性	-.09	-.04	.05	-.17	.07
	開放性	-.14	-.26 †	-.16	-.14	-.12

\*  $p<.05$ , †  $p<.10$

Table3 作品3における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

				女性		
		外向性	協調性	勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	.14	-.15	-.29*	.25 †	-.14
	協調性	-.17	.23 †	.40**	-.37**	.35**
	勤勉性	.03	.30*	.34*	-.38**	.21
	情緒不安定性	.10	-.09	-.27*	.08	-.15
	開放性	.03	-.07	.05	.05	-.06

\*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , †  $p<.10$

作品3では、男性登場人物の「外向性」得点と女性登場人物の「勤勉性」得点が負の相関 ( $r=-.29, p<.05$ ) を示し、男性登場人物の「協調性」得点と女性登場人物の「勤勉性」得点が正の相関 ( $r=.40, p<.01$ )、「情緒不安定性」得点が負の相関 ( $r=-.37, p<.01$ )、「開放性」得点が正の相関 ( $r=.35, p<.01$ ) を示した。また、男性登場人物の「勤勉性」得点と女性登場人物の「協調性」得点が正の相関 ( $r=.30, p<.05$ )、「勤勉性」得点が正の相関 ( $r=.34, p<.05$ )、「情緒不安定性」得点が負の相関 ( $r=-.38, p<.01$ ) を示した。さらに、男性登場人物の「情緒不安定性」得点と女性登場人物の「勤勉性」得点が負の相関 ( $r=-.27, p<.05$ ) を示した。

作品4では、男性登場人物の「協調性」得点と女性登場人物の「協調性」得点が負の相関 ( $r=-.31, p<.05$ )、「情緒不安定性」得点が正の相関 ( $r=.28, p<.05$ ) を示した。

作品5では、男性登場人物の「外向性」得点と女性登場人物の「情緒不安定性」得点が正の相関 ( $r=.27, p<.05$ ) を示し、男性登場人物の「開放性」得点と女性登場人物の「勤勉性」得点が正の相関 ( $r=.30, p<.05$ ) を示した。

作品6では、男性登場人物の「外向性」得点と女性登場人物の「協調性」得点が正の相関 ( $r=.35, p<.01$ ) を示した。

作品7では、男性登場人物の「外向性」得点と女性登場人物の「外向性」得点が負の相関 ( $r=-.27, p<.05$ ) を示した。

Table4 作品4における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

				女性		
		外向性	協調性	勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	.07	-.12	-.14	.12	.05
	協調性	-.09	-.31*	-.07	.28*	-.11
	勤勉性	-.04	-.11	-.14	.22 †	.00
	情緒不安定性	-.09	.01	-.12	.00	.13
	開放性	.26 †	.00	-.01	.04	.22 †

\*  $p<.05$ , †  $p<.10$ 

Table5 作品5における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

				女性		
		外向性	協調性	勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	-.02	.02	-.11	.27*	-.03
	協調性	-.03	-.01	.25 †	-.24 †	.03
	勤勉性	.01	.09	.14	-.25 †	-.26 †
	情緒不安定性	.08	-.13	-.20	.23 †	.02
	開放性	-.02	-.06	.30*	-.23 †	-.01

\*  $p<.05$ , †  $p<.10$ 

Table6 作品6における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

				女性		
		外向性	協調性	勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	-.13	.35**	.01	-.18	-.02
	協調性	-.09	.11	.07	.00	.14
	勤勉性	.15	-.16	.23 †	-.13	.00
	情緒不安定性	.20	.01	.15	.02	.08
	開放性	-.01	-.02	.17	-.04	.10

\*\*  $p<.01$ , †  $p<.10$

作品8では、男性登場人物の「協調性」得点と女性登場人物の「外向性」得点が正の相関 ( $r=.31, p<.05$ ) を示した。

作品9では、男性登場人物の「外向性」得点と女性登場人物の「情緒不安定性」得点が負の相関 ( $r=-.37, p<.01$ ) を示した。

作品10では、男性登場人物の「協調性」得点と女性登場人物の「外向性」得点が正の相関 ( $r=.39, p<.01$ ) を示した。

### パーソナリティによる登場人物の類型化と組み合わせ

調査対象者が回答した各登場人物のパーソナリティ評定の下位尺度得点を、その登場人物のパーソナリティ得点として、パーソナリティ5得点を用いて、登場人物20名について

Table7 作品7における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

		外向性	協調性	女性 勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	-.27*	.14	.15	-.20	.13
	協調性	-.21	.25 †	-.05	.09	.07
	勤勉性	-.09	.00	-.09	.12	.00
	情緒不安定性	-.25 †	.04	.19	-.10	.03
	開放性	-.01	-.12	.17	-.06	.02

\*  $p<.05$ , †  $p<.10$

Table8 作品8における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

		外向性	協調性	女性 勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	-.16	-.08	.06	.13	.03
	協調性	.31*	-.21	-.06	.02	-.01
	勤勉性	.19	.07	.11	-.20	.09
	情緒不安定性	-.25 †	.00	.03	.09	-.01
	開放性	.04	.17	-.01	-.24 †	.10

\*  $p<.05$ , †  $p<.10$

Table9 作品9における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

		外向性	協調性	女性 勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	.07	.13	-.01	-.37**	.02
	協調性	-.04	-.19	.11	.20	-.09
	勤勉性	-.07	.07	.19	-.05	.25 †
	情緒不安定性	.07	.05	.22 †	.06	.03
	開放性	-.05	.02	.03	.06	.03

\*  $p<.01$ , †  $p<.10$

Table10 作品10における男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点の相関

		外向性	協調性	女性 勤勉性	情緒不安定性	開放性
男性	外向性	.09	-.09	.09	-.18	-.06
	協調性	.39**	-.01	.17	-.01	.10
	勤勉性	-.06	.02	-.02	-.06	-.12
	情緒不安定性	-.24 †	.26 †	-.06	-.11	.03
	開放性	-.22 †	.08	-.16	.00	-.22

\*  $p<.05$ , †  $p<.10$

て、Ward 法・平方ユークリッド距離によるクラスター分析を行った。その結果、人数構成から、4 クラスターが最適であると判断された。各クラスターの特徴を明らかにするために、クラスターを要因として、パーソナリティ 5 得点について一要因分散分析を行ったところ、5 得点すべてにおいて要因の効果が有意であったため、Tukey 法による多重比較を行った (Table 11)。

クラスター 1 は、「外向性」得点や「開放性」得点がクラスター 4 と同程度に高く、「勤勉性」得点もクラスター 2、クラスター 3 と同程度に高かったが、「協調性」得点が最も低かった。関心が外に向かっており、好奇心も強く真面目であるが、他者と協調できないタイプであると考えられたため、クラスター 1 を「自由奔放型」と名付けた。

クラスター 2 は、「協調性」得点がクラスター 3 と同程度に高く、「勤勉性」得点もクラスター 1、クラスター 3 と同程度に高く、さらに「情緒不安定性」得点は最も低かった。気分が安定しており、真面目で、他者とも仲良くできるタイプであると考えられたため、クラスター 2 を「安定適応型」と名付けた。

クラスター 3 は、「協調性」得点がクラスター 2 と同程度に高く、「勤勉性」得点がクラスター 1、クラスター 2 と同程度に高く、「情緒不安定性」得点もクラスター 4 と同程度に高かった。また、「外向性」得点と「開放性」得点は最も低かった。真面目で他者と仲良くすることはできるが、関心が外に向かっておらず、気分も安定していないタイプであると考えられたため、クラスター 3 を「不安内向型」と名付けた。

クラスター 4 は、「外向性」得点や「開放性」得点がクラスター 1 と同程度に高く、「情緒不安定性」得点はクラスター 3 と同程度に高かった。また、「勤勉性」得点は最も低かった。関心が外に向いているが、不真面目で、気持ちも安定していないタイプであると考え

Table 11 クラスターを要因としたTIPI-J5得点の一要因分散分析結果

	クラスター1 4名	クラスター2 8名	クラスター3 5名	クラスター4 3名	F値( df ) 多重比較
外向性	4.53 (0.33)	3.77 (0.49)	2.37 (0.23)	4.65 (0.06)	34.49(3, 16)*** 3<2<1・4
協調性	2.79 (0.25)	4.20 (0.33)	4.03 (0.44)	3.44 (0.66)	12.32(3, 16)*** 1<3・2
勤勉性	4.14 (0.30)	4.39 (0.30)	4.09 (0.23)	3.25 (0.39)	10.56(3, 16)*** 4<3・1・2
情緒不安定性	3.41 (0.19)	3.14 (0.25)	3.77 (0.45)	3.77 (0.26)	5.67(3, 16)** 2<3・4
開放性	3.87 (0.27)	3.72 (0.24)	3.38 (0.20)	4.02 (0.18)	5.78(3, 16)** 3<1・4

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ 

Table 12 男性登場人物のクラスターと女性登場人物のクラスターの関連

		女性			
		自由奔放型	安定適応型	不安内向型	不安外向型
男性	自由奔放型	作品5	作品1		
	安定適応型	作品10		作品2・作品4	作品8
	不安内向型		作品3	作品9	
	不安外向型		作品6・作品7		

られたため、クラスター4を「不安外向型」と名付けた。

各作品における男性登場人物と女性登場人物のクラスターの組み合わせを調べたところ (Table 12)、「自由奔放型」の男性登場人物は2名おり、それらに対応する女性登場人物は「自由奔放型」が1名と「安定適応型」が1名であった。「安定適応型」の男性登場人物は4名おり、それらに対応する女性登場人物は「不安内向型」が2名、「自由奔放型」が1名、「不安内向型」が1名であった。「不安内向型」の男性登場人物は2名おり、それらに対応する女性登場人物は「安定適応型」が1名、「不安内向型」が1名であった。「不安外向型」の男性登場人物は2名おり、それらに対応する女性登場人物はどちらも「安定適応型」であった。

男女を問わない場合、「自由奔放型」同士が1組、「自由奔放型」と「安定適応型」が2組、「安定適応型」と「不安内向型」が3組、「安定適応型」と「不安外向型」が3組、「不安内向型」同士が1組であった。

#### 4——考察

本研究の目的は、ライトノベルの男性登場人物と女性登場人物のパーソナリティの組み合わせについて明らかにすることであった。まず、相関分析を行ったところ、ほとんどの作品において、男性登場人物のパーソナリティ5得点と女性登場人物のパーソナリティ5得点との間に有意な相関はみられなかった。また、クラスター分析を行い、4つのパーソナリティタイプを見出した。男性登場人物も女性登場人物もクラスター2「安定適応型」が4名と最も多かった。次に、作品ごとにクラスターの組み合わせを検討したところ、同じクラスター同士の組み合わせは10作品中2作品しかみられなかった。また、男性登場人物が「安定適応型」である場合、女性登場人物は「自由奔放型」(1作品)、「不安内向型」(2作品)、「不安外向型」(1作品)であり、女性登場人物が「安定適応型」である場合、男性登場人物は「自由奔放型」(1作品)、「不安内向型」(1作品)、「不安外向型」(2作品)となっていた。

久米(2009)は、ライトノベルにおける男性登場人物と女性登場人物との組み合わせについて、『涼宮ハルヒ』シリーズを例に挙げて、「ハルヒは強気な少女である反面、内心に虚しさを抱え、それを慰められるのはキョンだけである。さらに、ハルヒが危機に陥ると、キョンは意外なパワーを発揮して彼女と助ける」と述べている。本研究で扱った男性登場人物で最も多かったのが「安定適応型」であり、このタイプは、協調性、情緒安定性、勤勉性が高く、外向性や開放性も中程度であることから、冷静に物事を判断し、周りとも協調・調和しながら、物事を着実に進めていくことができる、適応的なタイプであると考えられる。一方、「自由奔放型」は協調性が低く、「不安内向型」や「不安外向型」は情緒不安定性が高いことから、周囲との関係や適応において、困難を抱えやすかったり、トラブルを起こしやすかったりするタイプであると考えられる。男性登場人物の「安定適応型」4名



が、「安定適応型」の女性登場人物とではなく、他の3タイプの女性登場人物と組み合わせられているのは、久米 (2009) が指摘するような「一見すると主人公の少年がひ弱で、強い少女に圧倒されるようにみえても、結局は従来通り少年の活躍で決着する少年小説」であるためであると考えられる。

一方、女性登場人物についても、「安定適応型」が4名と最も多く、この4名も、男性登場人物の「安定適応型」以外の3タイプと組み合わせられていた。これらは、何らかの困難を抱えていたり、周囲とトラブルを起こしたりしている男性登場人物を真面目で安定的な女性登場人物が助ける関係であると考えられる。このような関係は、高橋留美子のマンガ『めぞん一刻』における五代勇作と音無響子を彷彿とさせ、ライトノベルでは『マリア様が見ている』シリーズと類似している。久米 (2009) はこの『マリア様が見ている』シリーズについて、「もはやライトノベルには珍しいようなおしとやかで清潔な少女たちが描かれていることで、スタンダードな少女像を求めるタイプの少年読者に好まれたのではないかと考察している。

これらの指摘を考慮すると、男女どちらかの登場人物を「安定適応型」に設定することで、活発な女性の危機を地味な男性が助けるタイプを好む男性読者か、従来通りのおしとやかで清潔な女性像を求める男性読者のどちらかをとらえることができると考えられる。それを裏付けるように、「自由奔放型」と「不安内向型」や「不安外向型」という組み合わせや、「不安内向型」と「不安外向型」の組み合わせはみられなかった。これらからも、ライトノベルにおける男性登場人物のパーソナリティと女性登場人物のパーソナリティの組み合わせは、男性読者が望む男女の関係性が反映されていると考えられる。

本研究では、久米 (2009) の指摘がある程度支持されたと考えられる。一方、本研究においては、調査対象者全員にライトノベル10冊を読んでもらうことは困難であるため、人物紹介文という形をとって、パーソナリティ評定を求めた。しかし、実際のライトノベル上では、「人」ではない場合も多く、そのような設定の場合、読者は異なるパーソナリティ評定を行う可能性も考えられる。今後は、実際にライトノベルを読んだことがある者に対するインタビュー調査を行うことによって、本研究結果の検証を行う必要があると考えられる。また、久米 (2009) は、ライトノベルに対する男性読者と女性読者の意味付けの違いについても論じている。本研究では、調査対象者数が少なく、また分析手続き上、調査対象者における性差を検討しなかった。調査対象者の性差がパーソナリティ評定にどのように影響を及ぼすかについては、さらなる検討が求められる。

#### 《引用文献》

- 榎本 秋 (2008). ライトノベル文学論 NTT 出版  
久米 依子 (2009). 少年少女の出会いとその陥穽—性制度の攪乱に向けて 一柳 廣孝・一柳 依子 (編)  
ライトノベル研究序説 (pp.195-184) 青弓社  
日経キャラクターズ (編) (2004). ライトノベル完全読本 日経 BP  
小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ・ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の

試み パーソナリティ研究, 21, 40-52.

全国学校図書館協議会 (編) (2016). 学校図書館 11月号 全国学校図書館協議会

#### Appendix 人物紹介文例

##### 【作品1：男性】

以前暮らしていた場所で大きな権力をもちたいという気持ちを持っていたため、現在暮らしている場所で権力をもてるようになってから、以前暮らしていた場所に戻ろうと考えている。

以前暮らしていた場所をいざこざで追い出されたが、現在の場所で働くことを通して、現在の場所で生きることによって価値を見出しはじめた。以前は、権力に頼って多くの物を手に入れていたが、人として地道に働くことによって相手の心情を理解できるようになった。

##### 【作品1：女性】

海外では有名人だったが、日本に来てからは年齢を20歳と偽り契約社員として働いている。正義感が非常に強く、迷惑行為を繰り返していた知人(男性)を更生させるため、日本にやってきた。その男性に対して、強気な態度をとっていたが、日本でまじめに仕事をする姿を目にし、彼に対する考え方が少しずつ変わっていった。彼がケガをした時に手当をするようになるなど、態度も変化している。

付記：本研究は、2015年度および2016年度の青年心理学演習の一環として行われた研究を、著者が論文化したものである。人物紹介文の作成、質問紙の作成、データ入力などは、以下の学生によって行われたものである。

川越 彩香・鬼頭 和可菜・栗田 望美・鈴木 成美・中條 志保・中村 悠里恵・柳原 瑞樹・山田 発子 (五十音順)

————— [こうさか やすまさ・和光大学現代人間学部心理教育学科准教授]